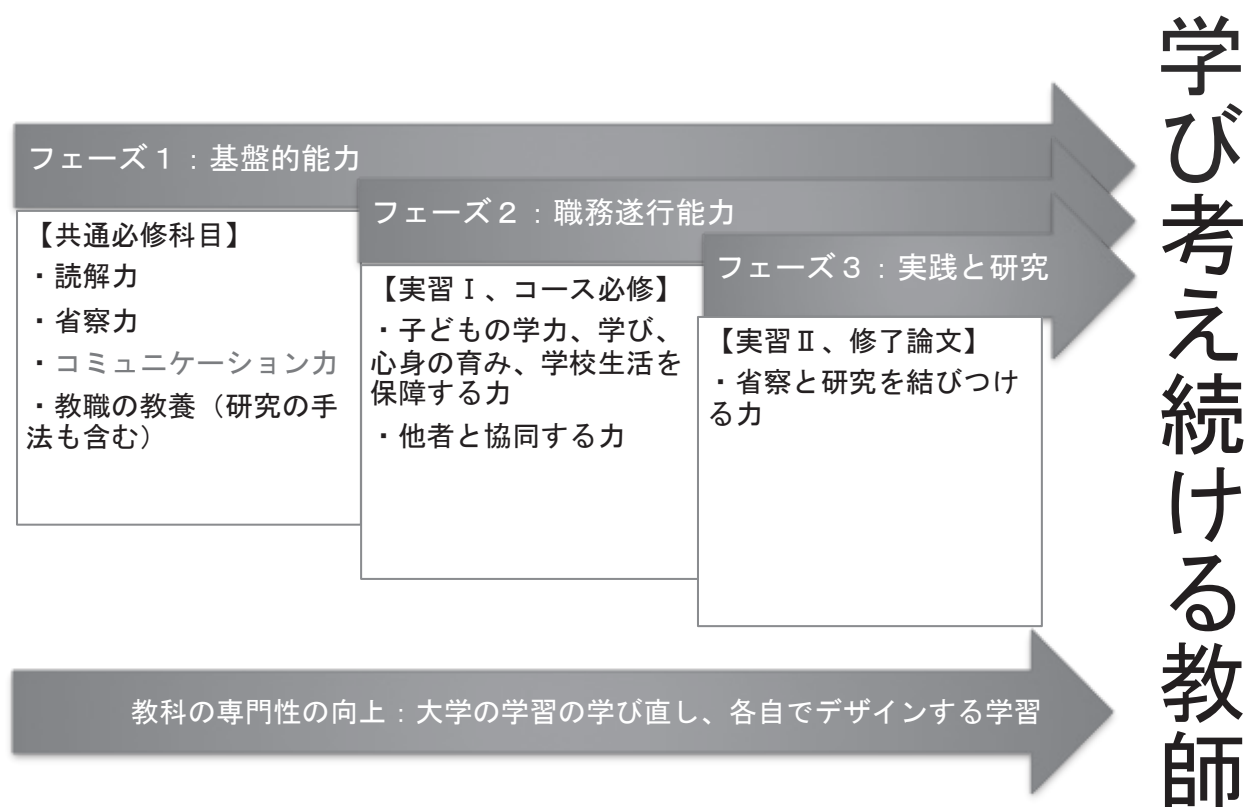


ストレートマスターコース構想 —院生の学びの継承を目指して—

徳永 俊太
(京都教育大学)

カリキュラム構想図

京都教育大学のストレートマスターに対する学びの道筋として、以下のような図を構想した。多くの教職大学院で重視される「省察」と現在の教師像として想定される「学び続ける教師」を組み合わせ、「学び考え続ける教師」を養成する教師像として想定した。学びと省察を結びつけることは、論語にある「学びて思わざれば則ち罔し、思いて学ばざれば則ち殆し」という文にもヒントを得ている。



学び
考え
続ける
教師

継承したい院生の学び

各フェーズにおける院生の学びは、現在の大学院で行われている授業、特に筆者が行なっている授業を参考にしている。フェーズ1で育てようとする読解力に関しては、2018年度に「現代社会と学校教育」において行なった実践を念頭に置いている。この授業では、「論文をゆっくり読む」ことをテーマにし、4時間をかけて一つの論文を読んだ。つまり読解力を目的によっ

て読む速度を変える力として想定している。フェーズ2は実習とコース必修での学びを想定している。学力は学習指導、心身の発達は生徒指導、学びは上記二つを統合するもの、子どもの学校生活は教師の学校での関わり全般（生徒に対してだけではなく、地域、チーム学校なども想定する）を意味している。フェーズ3は修了論文の作成を念頭に置いている。論文は自身による省察の集大成である。「主体的・対話的で深い学び」においてなされる自分との対話、他者との対話、先哲との対話もここでなされるであろう。論文の執筆によって、省察と研究を結びつける力が獲得されると考えられる。

これからの社会に生きる子どもと教師

「京都府教員等の資質能力の向上に関する指標」では、「グローバル化、情報化の進展等、社会が急速に変化する中であって、それらを踏まえた新しい時代の教育に対応」することが教師に求められている。これからの社会が大きく変化することに関しては、大きな異論はないであろう。そうした変化する社会において、教師と子どもの関係はどのように変化するのだろうか。私は、ある事柄については、子どもの方が教師よりも多くのことを知っているという関係が生まれてくると考えている。実際に、ICTの取り扱いなどは子どもの方が習熟している。教師が教室における絶対的な存在ではないのである。

そうした関係の中で教師には、個人だけではなく、集団（大人だけではなく子どもも含む）で教育活動を展開する必要がある。パウロ・フレイレが「教師であり生徒である教師」、「生徒であり教師である生徒」と述べたように、これからの社会において、教師と子どもは水平的な関係で学習を行うことがより求められる。「京都市教員等の資質・指導力の向上について」の中に採用時の姿として、「子どもや保護者と信頼関係を築きながら、子どもと共に学び、共に成長していこうとする姿勢がある」という文章がある。この姿勢を、これからの社会において常に持ち続けなければならない。

一方で、教師には果たさなければならない役割もある。成熟した大人として、子どもの発達を吟味し、ふさわしい学習を用意するという役割である。そのためには、図で挙げたように、読解力やコミュニケーション力が教師のスキルとして必要になるのである。コミュニケーション力は、何かを発信するという側面だけではなく、発信されたものを受け止めるという側面に着目しながら身に付けられなければならない。

新しいカリキュラムの開発に向けて

フォーラムでは、参加してくれた院生を意識して話を進めたが、彼らとの対話をカリキュラムの開発に生かすことは十分にできていない。上記に想定するような教師像を求めていくのであれば、教職大学院の教員も同じように院生とともに教育活動を展開していかなければならない。